

流す

流すことですよ

鍼師は遠慮がちにいう

凝り固まって澱んでいるものをほぐし

通り道を広げ

流れをよくすると

滞っていたものもあるべきように

行くべきように行くのです

自然にある筈のことが損なわれたとき

損なわれたところが苦しくなります

だから通り道を整え

溜まった老廃物やこみ入ったものを

ほぐしてやるのです

五十年の経験で得たものは

それだけだという

初老の鍼師のことばを

正確に伝えているのかどうか

おぼつかない限りであるが

大きくは外れていないと思う

そういえば座禅でも流すといった

座る、ただ座る

浮かんでくる諸々を、ただ流す

禅寺での面壁を前に

こむつかしい説教でも聞かされるのかと

なかば覚悟していたのに

和尚のことばはそれだけだった

四十五分の間

頭を過ぎる諸々を右から左に

左から右に流す
流すだけです

四十五分という簡単そうな

実は無限遠とでもいうべき時間の流れの

遅さに苛立ち

流すことの息苦しさに喘ぎ

恐ろしく流れの悪い四十五分が

ようよう過ぎれば

次の無限遠がゆらりと来てまた遅々と始まる

流すことです

ただ流すことです

鍼師は私の小さな経験にしか過ぎませんがと

顔を伏せながら小さくいった

栗の木を伐る

栗の木を伐った

新しい葉が

空の隙間を埋め重なり合い

青いイガが

百個余りも芽吹いていた

野趣に富んだ風情を好む

母が

四十五年前の新築記念に

幼い苗を

庭の片隅に植えたのだった

特別な世話など

何一つしないのに

庭を覆うほどの

見事な樹形となり

ずんぐり太った大粒の実

甘く柔らかかった

秋には

ピッカピッカに光る実を

近所に配り歩くのが

母の習いになった

五粒ずつだったのが

二十粒ずつになった

来年も必ず待つててね

車椅子を押す私も

一緒に微笑んだものだ

母は縁側に出て

スケッチブック一杯に

栗の木を描いた

後背の山より

栗の木は大きく

イガは太陽ほどもあつた

満州時代の作も加え

個展を開くのだという

自分の名前も

よく思い出せないのに

栗の木を描くときは

渾身の玉の汗を流した

主を失った栗の木は

変わらずに葉を茂らせ

もっこりと

美しい金色の実をつけた

ほんの二年前のことだ

いま位牌を本山に預け

仏壇の性根抜きをした

宅地は願い叶わず

更地にせねばならなくなった

庭を覆う栗の木の根元に

鋸の歯を当てたとき

まだ青いイガが

突然ぼとぼと落ちてきた

空が驚いたのか

じぐざぐに揺れ

纏れ合い

次々と冷たい汗が飛び散った

肩凝り

持病中の持病の一つ肩凝り

肩凝りですかあ

と笑われてしまうかもしれないが

肩凝りは侮れない

三十年前激しい痛みで

左腕が動かなくなつた

痛いと言つて

鋭いもの

鈍いもの

焼けるほどに熱いものなど

いろいろだ

肩凝りの痛みは

三つが合わさつたという痛みで

呼吸ができない

ものが言えない

眠れない

整形外科をハシゴし

マッサージに通い

お祓いにまで行つた

やけつぱちで鍼の門を叩いた

最も信用しなかつたのは事実で

コリをほぐすという説明が

インチキ臭く聞こえた

ふて腐れて治療台に一時間

折り重なつていた疲れが

一ミリほど剥がれた

二回目に三ミリほどが剥がれ
手が上がる

手が上がりますよ

思わず鍼師に言ったものだ

頑固な癡りなので

ほぐせるのかと気を揉み

久しぶりに必死になりました

少し斜めを向いたままで

盲目の鍼師は

静かなリンとした声で言った

于 孟蘭盆会

仏前に香花灯と共に
菓子果物等々を供え
家族一同うち揃いて
供養するなり

読経に続き
和尚の言葉が朗々と響き
鉦が鳴る

位牌には戒名が書かれ
写真の在りし日の笑顔は
変わらない

東日本大震災のこと
知ってる
そう聞いてみても

言葉は返ってこないけれど
皆知ってるよ
という念波が来ている
気がする

ならば進学のことは
ならば就職のことは
なんとかなるさ
と念波にはそうある
願わくばこの功德を
子々孫々にまで及ぼし
たまえ

和尚の言葉は
まだ続いている

あつちもこつちも
結構大変なんだよ
だから信じて進むしか
ないだろう

誰かがそう囁いた
気がして
鉦の音を聞いた

いま鳴いているヒグラシも
多分羽が光に溶ける
美しい透明な姿をしているに
違いない

声の方をずっと見上げても
声に移った方向に
目をじっと向けても
羽も姿も見えない

リリーリリリリー
ルルルルルルルと美しい
胸に染み入る声で
鳴いているのに

目の前を
何度も飛び交い
過ぎつたに違いないのに

多分羽が光に溶ける
透明な姿をしているので
人間の目には見ることが
できないのだ

ほらそこで
いまも
リリリリリリリー
キキキキキキと美しい
胸に染み入る声で
鳴いている

灯籠踊り

千人の浴衣姿の乙女たちが
頭上に金銀の灯籠を頂き
よへほ節のゆったりした
リズムにあわせて踊る

その昔の松明が

灯籠に変わり

頭上の金銀の灯籠は

和紙と糊だけで作られている

薄暗闇に千の灯が浮かび

千の蛍が渦を引いて舞う

乙女たちの表情は

天から舞い降りてきた

天女のごとくに

きりりと口結び

ほのかに笑みを浮かべ

あちらの世界へ迷い込んだ

に違いない

妖しささへ漂わせ

ゆっくりとゆったりと

斜めに横に

あちらからこちらへと

幾千の螢火となり

幾千の燐光となり

はじけ

翔けめぐり

胸奥の遙かなものに向かい

打ち付け打ち寄せ

穿ち揺らめく

法師蟬

庭先で

突然法師蟬が鳴き出した

ガラス窓のすぐ上のあたりで

大きな声で泣き出したので

ガラス窓を透かして

見上げた

昨夜の嵐で痛めつけられた

ダリアや

盆栽仕立ての松や

初秋の暖かい日射しを浴びて

ゆらりと立つトネリコのむこうの

隣屋から伸び出した樅の古木の枝に

銀色の羽をせわし気に揺らしながら

あたりの空気を震わせて鳴く

法師蟬がいた

風が曲がって吹いていた

トタン屋根がめくられていた

道路標識が転がっていた

家々の戸が開き

子どもたちの甲高い声が叫んだ

今日学校は休みだね

運動会は延期だね

法師蟬は少しずつ

後ずさりながら

大きな声で鳴き続けていた

ハグロトンボ

梅雨の頃から

ひっそりと居る

ハグロトンボ

濡れ縁に

玄關の伝い石に

夏草はびこる庭隅に

黒い紗の羽を広げたり

ゆっくり閉じたり

瑠璃色に光る細い胴体を

ピンと伸ばし

もの言わず

同じところに

翌日も翌々日も居る

湿った西風に飛ばされそうに

なりながらも

濡れ縁に

玄關の伝い石に

夏草はびこる庭隅に

貼り付いている

西風のときは羽を東に寄せ

東風のときは羽を西に寄せ

クマ蝉が賑やかに鳴き

アブラ蝉が幾度も幾度も鳴き

塩辛トンボが鼻先を過ぎつても

つくねんと

同じところに居る

蛙

表札に雨蛙が止まっている
軒の庇にも三匹
インターフォンにも一匹

ケロリとも鳴かず

動かず

セルロイドの置物よろしく
とまっている

可愛いですね

と喋ってくれた客もあったが
驚いたという客もあった

いつの間に住み着いたの
だったか

家族の話題に毎日のぼり

休みの日にもわざわざ
覗きに出て行く習わしにさえ
なった

いつもの場所に

いつもの顔ぶれが

すまし顔で

我が住まいはここだ

と誠に悠然ととまっている

一国一城の主なのだ

無人の家

無人の家をよく見かける
ほんの数年前まで

娘が孫を何人も連れて

いつも来ていた

夫人は

孫が来るのは嬉しいけど

守りをするのは大変だ

と言うのが口癖だった

半年前

トラックが二台来て

荷物を運び出して行った

転勤でね

と言う挨拶だった

定年を過ぎての

転勤もあるのかもしれない
と何も尋ねなかった

いつの間にか

周囲に無人の家が目立つ

無人の家は

雨戸が閉ざされ

門が閉ざされ

庭草が一面に覆い

庭木も屋根を覆い尽くし

四方に向かい茂る

同じ日に

無人の家の剪定が行われた

一軒は築四十年になるわが実家

門かけのメインツリーを

根本から切り倒し

垣根は塀よりも二十センチ低く

刈り込んだ

周囲の家々に迷惑をかけて

いるらしい

特に落ち葉の時期は

掃除に通い

周囲への挨拶に

幾度も廻ってきた

もう一軒は

あの孫だくさんの家

道路に大きく伸び出していた

モチの木や

カシの木や

鈴なりの実をつけたカキの木が

根本からバツサリと

切り倒されていた

カオス

小学生のボクを映し
中学生のボクを映し
間遠に落ちてくる雨だれ

一粒の雨だれの中に
小学生のボクがいる
拗ねて振れた顔をして
何にもつかまるものがない
という

恐れただ中にある
何を恐れたのか
何に拗ねていたのか
小学校に上がる頃までは
その訳を記憶していた
と思えるのに

小学四年生ぐらいから
理詰め of 授業が始まり
カオスとして抱えていた
記憶が消えてしまった

一粒の雨だれの中に
中学生のボクがいる
あの虚弱児だったボクが
変わったわけではないが
筋骨逞しくなり
百姓の仕事なら
一通りはこなせる
ほどになった

喧嘩はめっぼう強い
二人を投げ飛ばしたり

グラウンドでは

課外活動中に

戯れから始まり

相手の首を締め上げ

寸前のところまでいった

何でこうふて腐れて

いたのだったか

雨だれはいかにも気怠げに

落ちていくのだが

こんな田舎の片隅に

押し込まれていることに

本気で怒っていたことだけは

確かだ

理屈など言えないから

喧嘩ごしでしか言えないから

心臓の具合が悪いことなど

つい忘れてしま

売られた喧嘩に明け暮れた

ボクを映す雨だれ

本当は小学校に上がる前の

雨だれに出会いたいのだが

何かを抱えてきていた筈の

淡々としたあのものの

姿と気分はあるのだが

多分あつたのだが

思い出せない

カオスとして抱えてきた

それが何だったのかを

即興曲

ふいとメロディが浮かんでくる
何の曲だかわからない

多分即興の曲だ
と勝手に思い込む

おたまじゃくしも知らないし
音楽のイロハもわからない
変てこりんなメロディであるに
違いない

勝手に湧いてきて
すぐに消えてしまう

草のそよぎのメロディ
雲が流れるメロディ
葉が散りゆくメロディ

記憶にも残らない
今だけのメロディ
自分だけのメロディ
これでも即興曲などと
言えるのだろうか

定義など知らないから
今もトンボの群れ遊ぶ
メロディに一日浸っている

入道雲

飛行機の窓から入道雲を
見下ろす

鋭く切り立った崖が

奈落の谷となり

照り輝く雪渓が

いくつもいくつも

遠くにある

近くにある

目の前にもある

念仏寺の

野仏の頭の一面に

降り積んだ雪景色の

ごとくもあり

生きとし生けるものが

いつか必ず通るのだという

白銀の道のごともある

飛行機の胴体を

激しく揺らす気流の

上り下りなど頓着な気に

幾劫とも知れぬ

世紀を越えてきた

氷河の

氷山の

氷雪の厳しさに似た

太古の世界から吹き上げる

真白い綿毛にも似た異形のもものが

ひよっこりと湧き起こり

飄然と

悠然と

宙に漂っている

海峡の風

手を伸ばせば届きそうなところに

大きな街がある

街と街とを海峡が区切っている

外国船が通り

漁船が旗をなびかせて通り

連絡船が街と街とを結ぶ

街と街とは五分間の距離だ

潮の流れが速いことで有名な海峡を

大きく揺れ躍りながら

連絡船が風を切って進む

操舵室では若い女性が舵を握る

対岸の船着き場では

ぐらつく足元を確かめながら

船を降りる

岸が揺れているのか

自分が揺れているのか

波がうねっているのか

酔いの中に入っていくのか

目眩に似た酩酊を瞬時感じる

岸に降り立てばいきなりレトロ街で

明治の建物の出迎えに

不意の戸惑いを覚える

レトロ街の真ん中に超近代ビル

海峡の風はさらさらと吹き

五月の光を運び

駅前の噴水を子供たちの群れに

やさしく吹き流している

窓の外

六月の雨が降り籠める

空がいかにも重たい

伸び出した新芽が項を垂れ

下に真下にと降る

郵便受けに

カタログやハガキと一緒に

雨の粒が流れ込む

ハガキの宛名は膨れあがり

名前が読めない

気鬱が晴れない

出口のないことばが何度も

胸の内を巡り

濡れそぼった猫が

綿毛の尻尾をうち振り

音のない歩きでよぎる

寺の鐘がああおんと鳴り

今が夕暮れであることを

知らせているらしい

雨が真下に降るほかに

見えるのは

新芽の吐息と

肩の萎れた屋根ばかり

ゴッホ展

「ひまわり」の奔放さ

「灰色のフェルト帽の自画像」の激しさ

炎の画家といわれるゴッホの絵は

荒々しい気性の天才が

自由に書き殴ったものだと

うかつにも思っていた

ゴッホは三十近くになって

一人で絵を始め

ミレーなど大家の絵を

何枚も何枚も模写し

「掘る人」や

「種まく人」や

「刈る人」などという

同じ題名の素描を

これでもかこれでもかと

一心に描き続けている

バースペクティブ・フレームという

定規の形状の道具を用い

フレームから覗いたものと同じ対象物を

一点をもゆるがせにせず

忠実に写し取り

キャンバスに模写している

ゴッホの絵は

実に正確で繊細な技術と理論に

裏打ちされており

哀れなほどにおどおどしており

どこに未来の炎の画家の芽生えが

あるのだろうか

悲しくなるほどに小心だ

くだんの「自画像」にしろ

最後の時を過ごした「療養院の庭」にしろ

一点一点を痛性なほどに

明るい色と暗い色を交互に

貼り合わせ

正確無比な精緻さで描かれている

誠実で誠実過ぎるくせに

ナイーブでナイーブ過ぎるくせに

ゴッホの紡ぎ出す一点一点は

何故かほとばしり出る

明るさを伴って

何故にかほとばしり出る

しんじつな激しさを伴って

不思議な光の火矢となり

百二十年のはるかな時空を超え

今やさしく輝いている